

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7-11
府教育会館704号
TEL 06-6765-8904
FAX 06-6765-8905

父母と教職員の共同をひろげ すべての子どもが大切にされる教育を実現しよう

第35回大阪の障害児教育を よくする会総会

6月11日、第35回大阪の障害児教育をよくする会総会が開催され、オンライン参加と合わせて9団体36人が参加しました。2023年度の活動方針・予算案・総会アピール・役員体制が承認されました。学習では、池添素さん(NPO法人福祉広場)が「子どもも大人も笑顔にする子育てと実践」と題して講演をおこない、参加した父母や教職員で学び合いました。

障害のある子どもたちにとって よりよい学校づくりについて

開会あいさつの中で会長の岩田美穂さんは、「支援学校においては、2024年度開校予定の西淀川地域の新校整備、2023年度予算で示した豊能地域・大阪市北東部の新校整備、府立生野支援学校の府立大阪わかば高校敷地への移転(併設)計画があるが、整備される新校については大規模校の構想も聞こえてくる。障害のある子どもたちにとってよい学校かどうかをしっかりと見極める必要がある。保護者、教職員、関係者全員が力



あいさつする岩田会長

各地域のとりくみ・意見交流では、支援学校・支援学級の実態をはじめ、父母や教職員の様々な思いや地域でのとりくみが語られました。

子どもを知るための視点



子育てや実践について
講演する池添さん

学習会講師の池添素さんは、冒頭、子どもを知るための視点として2点紹介しました。1点目は、コロナ禍の子どもたちの家庭にはたくさんの「サイ」(マスクをしなさい、手洗いを

子どもの「育つ」を支える

池添さんは、子どもは発達する存在であるため、教育の役割は「育てる」のではなく子どもが「育つ力を支える」ことが基本であると述べました。そのためには、「ゆつくり・じっくり・

子どもも大人も笑顔になるために

また、子どもは発達の宿題(からだ、自我、大人との関係)を残して成長していくと述べ、気持ちの表出や自己選択、見通しを持って行動することや折り合いをつける力を獲得するなかでつまずきがあれば、ひとつ前の段階に戻って宿題にとりくむことが重要であると語りました。

講演の最後に、池添さんは、「子育てはいつも若葉マークで、なかなかうまくいかないから悩

書記局の つうしん

「教職員の評価育成システム」(以下、システム)の評価結果によって夏のボーナス(勤勉手当)の額に差が生まれる。では、上意評価者(S・A)を優遇する財源はどう捻出されるのか。「全員のボーナスから一定額がピンハネされる」が答えた。

ピンハネの仕組みは、①全教職員のボーナス(勤勉手当)から0・03月分を減額する、②扶養手当をボーナス(勤勉手当)算出基礎額から除算する、という2つの方法。これによって得られる財源約15億円(数字は2021年度実績。以下同じ)を上位評価者に乗せするのが、賃金リソククの仕組みだ。教職員一人あたりの1年の損失額は平均42372円にのぼる。では、賃金格差はどうか。参考モデル(45歳教諭)では、S評価とA評価との差は年間約14万円にもなる。肝心の評価は客観的公正に行われているだろうか。答えは「ノー」だ。「自己申告票」の中に「自立自己実現の支援」の項があるが、学校では担任団の集団的な力で子どもたちの育ちを支援している。学年・クラスづくりを個人の業績として評価できる根拠はない。「授業力」はどうか。学校では教職員がそれぞれの専門性を発揮し、教育実践が展開されている。校長がすべての教科・領域にわたって正当な評価を行える根拠はない。「システム」は教育の営みになじまず、結果として校長の学校経営計画への貢献度が主な指標となつて、評価が決定される。

「システム」の最大の弊害は、「上意下達の学校づくり」「もの言わぬ教職員づくり」だろう。現場の活力が弱まり、ひいては子どもの教育へのマイナス効果として働く。根本的欠陥をもつ「システム」の撤回を要求しよう。

(S)

大障教定期大会 発言ダイジェスト(その3)

仕事を続けられたのは組合があつてこそ バトンを次世代へ

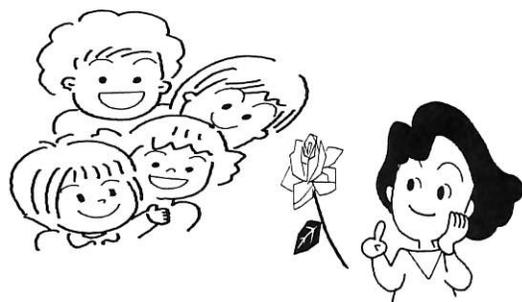
中央聴覚支援分会 近友代議員



「心もからだもサポートしてもらった」と素敵な言葉ももらいました。この言葉のバトンを若い方たちにつなげていきたいです。

今年度、学校長に対し分会として申し入れをおこないました。役員6名が出席し、「民主的な学校運営」を求め、「労働条件など変更があればすぐに教職員に報告すること」「若い教職員の声を聴き、より良い職場の実現」などの具体的な項目を提示しました。

学校長は、「子ども中心に障害用教育の発展を進めていく」と約束しました。忙しい日々のなかですが、集まり、情報共有しながら、つながりを大切に、仲間を増やしていきたいと思っています。



「これはおかし」が、新たな制度につながる

女性部 池田代議員

職場では、長年勤務いただいた組合員の方々の退職・転勤で組合員が減少しています。しかし、昨年9月と今年4月に新しい仲間を迎えることができました。お二人とも子どもに対して優しい目線で寄り添っていただいて、本当に素敵な方だと感じていました。是非仲間になってほしいと思いい、声をかけました。

今年3月に退職された方を囲み、分会交流会ができました。20名近く集まり、職場の様子を交流するともに、退職者の方から発言をいただきました。退職者の方は「組合を辞めようと思ったことはなかった」「子育てや介護など年齢とともに大変なことが変わっていくけれど、仕事が続けられたのは組合のおかげ」



女性部では年5回の委員会と年1回の総会、夏の学習会、を行っています。委員会の前にはミニ学習会で女性の身体や労働法についてなど、さまざまな学習を行っています。私は大障教が変わってから役員をさせていただいており、積極的に組合活動に参加していたわけでもないし、

労働についてもよくわかっていないことが多いです。子育てもあり、仕事に追われる毎日ですが、こんな私でも役員を続けられているのは、周りの皆さんが「無理せず、できる時にやってくれたらいいよ」と声をかけてくださったおかげです。そんな雰囲気があります。また、委員会は二か月に一回くらいペースで土曜日の午後にあるので、大変なくもありませんが必ず「行ってよかった」と元気をもらって帰ってきます。

委員会に出席するようになってから感じたことは、委員さんの中からの「これはおかし」「なんとかならないのか」という意見が形になって制度が作られていることがある、ということ。昨年夏の成果として「出生サポート休暇」と「小中学部の産育休代替の事前任用」があります。「出生サポート休暇」は東住吉でも昨年取得された先生が妊娠されて、今、育休を取られています。ただ、制度ができて、日数や人手が足りずに周りに気を遣って制度を使えない、という現実

青年部交流企画 第一弾☆六甲山山登り☆

今回は大障教青年部だけでなく、府高教(府立高校の教職員組合)青年部といっしょにコラボし、六甲山へ山登りに行きました。初めて交流企画に参加してくれた方も複数おられ、終始和やかな雰囲気でした。

当日は阪急御影駅から歩いて「六甲ガーデンテラス」を目指しました。住宅街から山道を抜け、川や木々を抜けながら頂上を目指しました。道中、きれいな花や、麓が一望できる場所で休憩したり、小鳥のさえずりなどを聞きながら進みました。下山後は登山で疲れた体を有馬温泉で癒し、大阪に戻って交流会をしました。一日を通して、楽しい笑顔が絶えない日となりました。参加された方からは、「とても天気が良くて最高でした。六甲ガーデンテラスからいい景色を見ることができ、道中ずっと楽しかったです!」などの感想が寄せられました。



今年度も「楽しく、学んで、交流を!」を合言葉に、青年のみなさんが職場の垣根を越えてつながれるようとりくみを企画していきます。ぜひ、積極的にご参加ください。(青年部長 奥 正行)